

## 南部バプテストとエキュメニズム (I)

金丸英子

レイ・ウィルキンス (Ray Wilkins)<sup>1</sup>は2017年秋にアメリカのバプテスト学術雑誌 *Baptist History & Heritage* に投稿した論文 “When Southern Baptists Were Ecumenical, 1899-1919” で、南部バプテスト連盟がその歴史中でエキュメニズムに理解を示し、異なる教派との具体的な協力関係の構築に積極的であった時期が存在したことを論じている。その期間はわずか20年間という短さではあるが、教派中心主義と反エキュメニズムで知られている南部バプテスト連盟の理解に新たな光をあてようとしている。本研究ノートでは、まず南部バプテスト連盟がエキュメニズムに積極的であった時期についてウィルキンス論文から学び、それに続いて、(南部)バプテストが反エキュメニカルに舵を切った時期と根柢の一端を資料から探ろうとするものである。

### 南部バプテスト連盟とエキュメニズムの蜜月：1899年－1919年

ウィルキンスは、1899年から1919年に南部バプテスト連盟がエキュメニズムに自らを開き、エキュメニカルな関係構築に積極的であったと主張する。1845年創設の南部バプテスト連盟は、南北戦争（1861年－1865年）の敗北によって人的・財的に甚大な打撃を受け、20世紀の初頭にその痛手からどうにか立ち直りを見せるようになった。その前後、南部バプテスト女性宣教同盟 (Southern Baptist Woman's Missionary Union, 1889年)、日曜学校局 (Sunday School Board,

---

1 Ray Wilkins, “When Southern Baptists Were Ecumenical: 1899-1919,” in *Baptist History & Heritage*, Fall, 2017, 79-90. Wilkins はアメリカ・テキサス州 Lebanon Baptist Church の主任牧師で、Southwestern Baptist Theological Seminary から Ph.D. を授与されている。

1891年)、サウスウエスタンバプテスト神学校 (Southwestern Baptist Theological Seminary, 1907年) など教派の関係諸機関の創設が続き、アメリカ社会の進歩主義思想による社会改革のうねりの中で、南部バプテスト連盟も自派のさらなる成長を目指すようになる。ウィルキンスは、その時期が南部バプテストが他派との協力関係構築を目指すようになった時期と重なると指摘する。

ウィルキンスが南部バプテストのエキュメニズム指向の兆しを1899年とする根拠は、南部バプテスト連盟がロンドン宣教会議 (London Missionary Conference, 以後ロンドン会議) に端を発する一連の超教派の働きに正式な代表を送った最初の年が1900年だったからである。ロンドン会議はヨーロッパとアメリカのプロテスタント諸派によって始められた超教派の宣教会議で、その関心は会議の名称が示す通り伝道 (evangelism) にあり、特に海外伝道が議論の中心であった。この場合の伝道の関心は、「聖書の使信をさらに広く海外で伝える」という素朴な情熱からくるものであって、そのためにプロテスタント諸教派は教派の違いを超えて互いに協力すべきことが謳われた。海外伝道における教派間の協力は、国内伝道においても同様にすべきことが主張された。そのスピリットは1910年に開催されたエディンバラ世界宣教会議 (the World Missionary Conference at Edinburgh, 以後エディンバラ会議) に象徴される。

これより以下はウィルキンス論文が触れていない部分であり、筆者が今回新たにリサーチしたものである。エディンバラ会議開催に先立って、19世紀末には少なくとも3度の宣教会議が英国のプロテスタントのリードによって開催された。それにアメリカのプロテスタントが初めて参加したのは、のちに「Centenary Conference」と呼ばれるようになる1888年開催のニューヨークでの3度目の会議 (以下、ニューヨーク会議) である。南部バプテスト連盟はこの会議にアメリカ聖書協会、アメリカ長老派、アメリカン・ボード、アメリカン・バプテスト宣教同盟に混じって代表を送ったが、その理由は前年にニューヨーク会議の準備委員会から正式な招待が連盟宛に送られてきたためである。この会議に南部バプテスト連盟を代表して、当時の外国伝道総主事 H.A. タッパー (H. A. Tupper) が派遣されることになった。この会議の目的は、その次の年に開催予定のロンドンにおける宣教会議の議題を決めることであったが、そのた

めの準備委員会がロンドンではなくアメリカで開催された理由は、アメリカのプロテスタントによる支援獲得のためであり、ロンドン側はアメリカ側の人的・財的協力抜きにしてロンドンでの宣教会議の成功を考えられなかったためである。

ニューヨーク会議では主に海外伝道の現場で宣教師の抱える問題に関心が寄せられ、その焦点は宣教師と伝道地における現地の働き人たちとの関係に関する問題であった。その中で、「伝道活動における合同と協力」と題された課題では現地での教派の組織合同にまで話し合いが及んだ。この会議に南部バプテストを代表して出席していたタッパーは他派の代表たちとの友好的な交わりを楽しみ、会議自体の印象は必ずしも悪いものではなかったが、次の点で警戒感を抱いた。まず、この委員会がカトリック国の伝道に消極的であること。2番目は教派教会の合同まで突き進む可能性を秘めた委員会を支配する強い教派間協力の意向、3番目は開放陪餐の容認である。タッパー自身は南部バプテストとして、これら3点を曖昧にしたままで超教派の協力に進むことの困難を覚えた。

それでも南部バプテスト連盟は1888年のロンドン会議に代表者を派遣することを決定し、タッパーもその一人として指名を受けた。しかし、実際には理由は不明であるが参加が不可能となったため、代理が立てられたようである、このロンドン会議は、アメリカ側からの219名、ヨーロッパ側からの41名を含む総勢1600名の出席をもって10日間の日程で開催され、宣教方策、医療伝道、女性の働き、文書伝道、教育、自国教会の問題、教会と国家の関係をテーマに50に及ぶ協議会が行われたが、教会合同はその中心課題であった。

ロンドン会議で共有されたのは、欧米のプロテスタント諸教派による海外伝道の低迷であった。現地における回心者数は減少し、それまでの伝統的な伝道方策は行き詰まりを見せていた。それを打破する方法は、欧米の諸教派が一丸となって、福音伝道が及んでいない地域に出てゆくことであった。そのためにますます教会合同の必要が叫ばれるようになっていた。この際の「教会合同」は現地の教派教会の合同まで視野に入れられ、とりわけ、中国や日本で伝道活動を行っていた宣教師たちの声が大きく反映された形となった。

しかしながら、議場では諸教派の合同が同意を得ることは至難の業であった。その後の議事録によれば、議場が確認した教会合同を阻む主要な要素は、教会合同に伴う各教派の伝統や独自性を犠牲にすることに対する躊躇とおそれであった。会議はこの難題の解決に緻密な議論を展開できないまま、ある意味、楽観的な理想主義で教会合同を進めようとした。

この中で、唯一疑義を呈したのはバプテスト派であった。カナダ・バプテスト宣教団 (Canadian Baptist Mission) は多教派が奉じる幼児洗礼の容認を懸念し、バプテストとしてその点を素通りしての教派合同は極めて困難であるとの声を上げたが、議場の多数派によって飲み込まれてしまう。アルジェリアのスウェーデンミッションの宣教師は、「形式や表現は単なる手段の問題に過ぎない。我らはもっと中心的で主要な目的に進むべきである」とのべた<sup>2</sup>。このように教派合同の熱気は高まり、教派間の一致を確認するために会議の最終日に主の晩餐を執り行うことが決まった。

ウィルキンス論文は、南部バプテスト連盟がこのロンドン会議をどう受け止めたかについて述べている。1890年の南部バプテスト連盟定期総会で、ケンタッキー・バプテスト州連盟の機関紙 *Western Recorder* の編集責任者イートン (T. T. Eaton) が誌上にロンドン会議の採択事項を紹介し、それに基づいて、南部バプテスト連盟内でも教派間協力に向けた学術レベルでの議論が必要であると訴えた。その作業には聖書の権威に忠実であることが確認されたが、同時に議場で問題となったのは、「何をもって聖書の権威というのか」という点であった。この問いの背景には、当時の南部バプテストが抱いていた近代的な研究手法による聖書解釈に対する懸念があったことは明らかである。ウィルキンスによれば、イートン自身はランドマークイズム<sup>3</sup>の主張に好意的であったが、

---

2 James Johnston, ed., *Report of the Centenary Conference on the Protestant Missions of the World*, vol. II (New York: Fleming H. Revell, 1888, 482.

3 1850年代、テネシー州のバプテストペーパー主管であったジェイムズ・ロビンソン・グレイヴス (James Robinson Graves) が中心となって米国・南部地方に広めた運動。名称は旧約聖書の箴言 22 章 28 節「昔からの地境を映すな。それは先祖が定めたものだ」(聖書協会共同訳)に由来し、19世紀初頭のリベラリズムと協力伝道機関を攻撃した。偏狭な教会論を展開し、バプテスト教会の聖書の正統性を固持した。バプテスト誕生

それでも福音伝道のための教派間のある程度の協力はやむを得ないと考えていたという<sup>4</sup>。イートン自身は、各教派が聖書を基盤にするならば、そこから教派間協力の道は自ずと開けるとの楽観的な見通しを持っており、連盟もその主張を受け入れて諸教派に対話を呼びかける書簡を送るも、それにはディサイブル派のみが応答し、その他の各教派からの応答を得ることはなかった<sup>5</sup>。教派間協力の構築に積極的だったイートンの努力は、結局、1895年の南部バプテスト連盟定期総会でピリオドが打たれた。教派団体としての南部バプテストは教会間協力を諦めたが、イートンの主張に動かされた個人は存在し、中には教派組織の合同 (organic union)こそがイエス・キリストの栄光を反映すると主張する牧師も現れ、南部バプテスト連盟の諸教会レベルでは、イートンが主張したエキュメニズムに賛意を示す教会が存在していた<sup>6</sup>。そのためかどうかは定かではないが、1900年の連盟定期総会は教会合同を専門的に研究する特別委員会の設置が決定されたという。

ウィルキンスは、南部バプテストがロンドン会議の最終日に行われた参加者全員による主の晩餐をどう受け止めたかについては記していない。筆者のサーチによれば、これに対して南部バプテストの嫌悪感は相当なものであったことが当時の南部バプテスト連盟外国伝道局総主事のタッパーの筆から伝わ

---

の起源をイエスの使徒の時代にまで遡らせ、そこから途切れることなく継続している真実無二の聖書の教会がバプテスト教会のみであると豪語した。閉鎖的な各個教会主義を唱え、バプテスト教会以外の礼拝、牧師、礼典を認めなかった。特にバプテスマについては「当該教会の浸礼のバプテスマ」に拘ったため、同じ主張に立つ教会で授けられたバプテスマであってもその普遍性は認めなかった。また特殊な聖書解釈に立って「各個教会のみが福音伝道の担い手である」と主張し、協力伝道団体である南部バプテスト連盟を攻撃的とした。思想的にバプテストの各個教会主義と類似する点が多くあったため、南部バプテスト連盟を構成する南部地方一帯のバプテスト教会や信者に大きな影響を与え、南部バプテスト連盟は内部分裂の危機に瀕した。ケンタッキー州のバプテスト教会牧師 J.M.ペンドウルトン (James Madison Pendleton) は 自著 *An Old Landmark Re-Set* や *Baptist Church Manual* を駆使して、ランドマーキズムの思想を広く紹介する一翼を担った。運動自体は次第に消失したが、その思想的影響は今日まで残っている。

4 Wilkins, 80-81.

5 同上, 81.

6 同上, 82.

る。タッパーは自著 *Southern Baptist Foreign Missions* でそれを口を極めて非難している。その理由は、主の晩餐は純粋にバプテスマに次ぐ各個教会の礼典であり、主の命令に対する信仰の従順を示すものであるというバプテストの見解によるものであった。これまでバプテストは、教派間協力に対してある程度の多教派との立場の相違を容認してきたが、この点では譲ることができなかったと思われる。南部バプテスト連盟にとって、明らかにこの出来事が分水嶺となり、バプテストとバプテスト以外のプロテスタント諸教派との協力から身を引くきっかけとなったと思われる。そして、それは南部バプテスト連盟の Baptist World Alliance 創設 (BWA, 1905年) への情熱となっていったことは疑えない。

### 南部バプテスト連盟、反エキュメニズムへ邁進す：J. F. Love の影響

20世紀前半の南部バプテスト連盟の最大の課題は、教会合同に関する立場を固めることだった。その中心的人物は J. F. ラブ (Jeremiah Franklin Love, 1859-1928) であり、国内伝道渉外主事、並びに外国伝道局渉外主事として南部バプテストの伝道理念に大きな影響力を及ぼした。

南部バプテスト連盟は1913年の定期総会で、連盟の機構改革に関する研究チームの創設を決議した。総会の委託を受けたこの委員会は、翌年の定期総会に報告書を提出し、連盟と諸事業体の関係をさらに強化すること、連盟初の信仰宣言作成を提言した。これらは両方とも南部バプテスト連盟の教派色の強化につながるものであるが、この背景にはあきらかに当時のエキュメニズムに対抗する連盟の意志が存在したことは、翌1914年の連盟総会記録中の、“[T]he Southern Baptist Convention concentrates on strengthening its denominational program rather than becoming deeply involved in ecumenical efforts” (Annual of Southern Baptist Convention, “Proceedings”, 1914, p3) からも読み取れる。委員会はこの総会で「Pronouncement on Christian Union and Denominational Efficiency」と題したレポートを提出したが、この内容がその後の南部バプテストの反エキュメニズムの規準となった。

ラブはそれに先立つ10年前に、すでに南部バプテストの教派中心主義を鮮明

にしていた。ラブが1903年に出版した *The Baptist Position and the Position for a Baptist* (Sunday School Board of the Southern Baptist Convention) では、南部バプテストの礼典と教会員資格に関する記述が2部構成で論じられている。そこでは同時に、当時のアメリカ国内のエキュメニカル運動による、ユダヤ教、カトリック、ユニテリアン、ユニバーサリストとの対話の模索を強く警戒し、批判もしている(9頁)。ラブによれば、そのような教派の立場はバプテストが伝統的に尊重してきた信教の自由とは合い入れず、それぞれの宗教の特質を平板化し、その多様性を飲み込んでしまいかねない思惑や組織合同に進む可能性を秘めるものとして断固反対すると述べる(9-10頁)。その根拠は、数あるプロテスタント諸教派にあって、南部バプテストこそがイエスの教えを純粋に堅持する真実のキリスト者であるとまで豪語する狭いバプテスト主義であった。その根拠は各個教会に委託されている浸礼のバプテストと閉鎖晩餐であった。ラブにとって、浸礼以外のバプテストは存在しなかった(17-21頁)。閉鎖晩餐の聖書的根拠をルカ22:7-20に求めたが、その根底にも浸礼のバプテストこそが聖書的なバプテストであり、それを以て教会の入会としない教派の晩餐の行い方は聖書的ではないとも論じた(47頁)。

ただ興味深いことに、ラブは他教派に対するそのような南部バプテストの狭さを間違いだとは思っていない。ラブによれば、南部バプテストはいつでも他教派を歓迎する用意はあるが、むしろ他教派の方が南部バプテストに来ようとはしないところに問題があるとまで喝破する(47頁)。よって、当時、南部バプテスト連盟は進んで他教派に自らの扉を開く必要性を見ていなかったと思われる。南部バプテストの使命は、神の言葉を擁護することであり、他教派を貶めるためではなく、自分たちの魂の救いと他者の魂を危険にさらさないように努めることであるとも述べる (“to defend God’s Word and not to offend our brethren...to save our own souls and to avoid endangering the souls of others.”, 50頁, 斜線はラブによる)。南部バプテスト連盟のこのような教派中心性に裏打ちされたラブの反エキュメニズムの立場は、1918年に出版した *The Union Movement* でさらにエスカレートするようになる。

## 南部バプテスト連盟の外国伝道理念とラブ

*The Union Movement* は、当時国内伝道主事としてのラブの伝道理念が述べられている。因みに、本学図書館には2冊が収められているが、筆者が借り出した巻には南部バプテスト宣教師「E. O. Milles」の署名があるので、当時、日本で活動していた南部バプテスト宣教師の間でこれが読まれていたことを示している。当時の南部バプテストは超教派の協力態勢を *ecumenism*, *Christian union*, あるいは *church union* と表現していた。「*church union*」は教派合同をも暗示する用語であるが、南部バプテストにとっては教派間の協力と教派合同が同義であった。これは南部バプテストのエキュメニズムに対する独特な理解に加え、1910年のエディンバラ会議が提唱したエキュメニズムがより広い福音宣教のためは、教会合同に端を発する教派合同を視野に入れていたからである。

ラブの教会合同に関する立場は、1914年に南部バプテスト連盟定期総会で確認された反エキュメニズムに対する見解に沿っている。ラブの思想が南部バプテスト連盟の宣教理念にどのように反映されたのかを知ることは、日本に伝えられたバプテスト理解のある側面を理解するために価値があると思われる。加えて、それがバプテスト本来の主張と比較してどうであるかを吟味せねばならない。今後は、1914年当時の南部バプテストを取り囲むアメリカ・プロテスタント諸教派の動向、その年の定期総会で主張されたエキュメニズムに対する南部バプテスト連盟の根拠、さらに「*Pronouncement on Christian Union and Denominational Efficiency*」レポートを読み込み、南部バプテスト総体の反エキュメニズムの全容を把握することが求められる。ラブの思想形成の理解のために、今日入手が可能なラブの著作に当たることも必要となろう。

最後に、これは推測の域を出ないが、そのような南部バプテスト多数派の中にもエキュメニズムに開かれた少数の南部バプテストもいたと思われる。これは南部バプテスト以外のバプテストに同じであろうことは十分に考えられるため、その探求も必要となろう。